

重複動詞とその古英語における発達 Reduplicating Verbs and their Development in Old English

森 基雄
MORI Motoo

古英語における強変化動詞類の中でも6類と並び、あるいはそれ以上にユニークで複雑な様相を呈するのが7類として分類される重複動詞(reduplicating verbs)と呼ばれるグループである。重複動詞は5、6類と同じく現在と過去分詞の母音が同一であり、さらに6類と同じく過去の単数と複数の母音が同一である。重複動詞はさらに、ゲルマン祖語での現在時制の語根構造に基づき、大体次のような分類が可能である。

- (a) 語根構造が①Gmc ai プラス阻害音のもの、②Gmc au プラス阻害音またはwのもの、③Gmc al プラス子音のもの、④Gmc an プラス子音のもの。
- (b) 語根構造が Gmc ē⁺ プラス阻害音のもの。
- (c) 語根が Gmc ē⁺ で終わっていたもの。
- (d) 語根構造が Gmc ō プラス阻害音のもの。
- (e) 語根構造が Gmc ō プラス w のもの。
- (f) 語根が Gmc ō で終わっていたもの。

次にこの(a)~(f)の4主要形の実例を示す。

- (a) 語根構造が①Gmc ai プラス阻害音のもの、そして以下②、③、④。

①語根構造が Gmc ai プラス阻害音のもの : OE *hātan* 'to command' ~ *hēt*, *heht* ~ *hēton*, *hehton* ~ *hāten* (OS *hētan* ~ *hiet*, *hēt* ~ *hietun*, *hētun* ~ *hētan*, OHG *heizan* ~ *hiaz* ~ *hiazun* ~ *giheizan*, ModHG *heißen* ~ *hieβ* ~ *hieβen* ~ *geheiβen*, Go *haitan* ~ *haihait* ~ *haihaitun* ~ *haitans*) ; OE *lācan* 'to play' ~ *lēc*, *leolc* ~ *leolcon* ~ *lācen* (ON *leika* ~ *lék* ~ *léku* ~ *leikinn*, Go *laikan* ~ *lailaik* ~ *lailaikun*) ; OE *scādan* 'to divide' ~ *scēd* ~ *scēdon* ~ *scāden* (OS *skēdan*, *skēthan* ~ *skēth* ~ *-skēthan*, OHG *skeidan* ~ *skiad* ~ *skiadun* ~ *giskeidan*, *giskeitan*, ModHG *scheiden* ~ *schied* ~ *schieden* ~ *gescheiden*, Go *skaidan* ~ *skaiskaid* ~ *skaiskaidun*) ; OE *swāpan* 'to sweep' ~ *swēop* ~ *swēopon* ~ *swāpen* (OHG *sweiffan* ~ *-sweiffan*, ModHG *schweifen*, ON *sveipa* ~ *sveipinn*, 過去形は1類に移行した *sveip*, *svipu*) ; OE *spātan* 'to spit' ~ *speoft* ~ *speoftun*.

②語根構造が Gmc au プラス阻害音またはwのもの : OE *bēatan* 'to beat' ~ *bēot* ~ *bēoton*, *beoftun*, *beaftun* ~ *bēaten* (ON *bauta* ~ *bautinn*, OHG *bōzan*) ; OE *hēawan* 'to hew' ~ *hēow* ~ *hēowon* ~ *hēawen* (OS *hauwan* ~ *heu* ~ *gihauwan*, OHG *houwan* ~ *hio* ~ *hiowun* ~ *gihouwan*, ModHG *hauen* ~ *hieβ* ~ *hieβen* ~ *gehauen*) ; OE *hlēapan* 'to leap' ~ *hlēop* ~ *hlēopon* ~ *hlēapen* (OS *-hliopun*, OHG *loufan* ~ *liof* ~ *liofun* ~ *giloufan*, ModHG *laufen* ~ *lief* ~ *liefen* ~ *gelaufen*, ON *hlaupa* ~ *hlióp* ~ *hliópu* ~ *hlaupinn*, Go *us-*, *afhlaupan*).

③語根構造が Gmc al プラス子音のもの : OE *feallan* 'to fall' ~ *fēoll* ~ *fēollon* ~ *feallen* (OS *fallan* ~ *fell* ~ *fellun* ~ *gifallan*, OHG *fallan* ~ *fial* ~ *fialun* ~ *gifallan*, ModHG *fallen* ~ *fiel* ~ *fielen* ~ *gefallen*) ; OE *fealdan* 'to fold' ~

fēold ~ fēoldon ~ fealden(OHG faldan, faltan ~ fiald ~ gifaldan, gifaltan, ModHG falten, Go faifalþ) ; OE healdan 'to hold' ~ hēold ~ hēoldon ~ healden(OS haldan ~ held, hield ~ heldun, hieldun ~ gihaldan, OHG haltan ~ hialt ~ hialtun ~ gihaltan, ModHG halten ~ hielt ~ hielten ~ gehalten, Go haldan ~ haldans) ; OE wealcān 'to roll' ~ wēolc ~ -wealcen ; OE wealdan 'to rule' ~ wēold ~ wēoldon ~ wealden(OS waldan ~ weld ~ weldun, OHG waltan ~ wialt ~ wialtun, ModHG walten, Go waldan) ; OE weallan 'to boil' ~ wēoll ~ wēollon ~ -weallen(OS wallan ~ well ~ wellun, OHG wallan ~ wiel ~ wielun, ModHG wallen) ; OE stēold 'possessed', 過去形のみ例証される(Go staldan ~ staistald)。

④語根構造が Gmc an プラス子音のもの : OE spannan 'to span' ~ spēonn ~ spēonnon ~ spannen(OHG spannan ~ spian ~ spianun ~ gispannan, ModHG spannen) ; OE gangan 'to go' ~ gēong ~ gēongon ~ gangen(OS gangan ~ geng, gieng ~ gengun, giengun ~ gangan, OHG gangan ~ giang, geng ~ giangun, gengun ~ gigangan, ModHG gehen ~ ging ~ gingen ~ gegangen, Go gaggan ~ gaggans) ; OE bannan 'to summon' ~ bēonn ~ bannen(OS bannan, OHG bannan ~ gibannan, ModHG bannen) ; 縮約動詞 OE fōn 'to take' ~ fēng ~ fēngon ~ fangen(OS fāhan ~ feng, fieng ~ fengun, fiengun ~ gifangan, OHG fāhan ~ fiang, feng ~ fiangun, fengun ~ gifangan, ModHG fangen ~ fing ~ fingen ~ gefangen, Go fāhan ~ faifāh ~ faifāhun ~ fāhans) ; 縮約動詞 OE hōn 'to hang' ~ hēng ~ hēngon ~ hangen(OS hāhan ~ -hangan), OHG hāhan ~ hiang, heng ~ hiangun ~ gihangan, ModHG hängen, hangen ~ hing ~ hingen ~ gehangen, Go hāhan ~ haihāh ~ hāhans)。

縮約動詞の不定詞 fōn, hōn は Gmc *fanhanan, *hanhanan > POE *fōhan, *hōhan > (母音間の h の消失)*fōan, *hōan > (a の消失)OE fōn, hōn という音過程の結果である。しかし現在時制においては語根末子音 h は命令法単数 Gmc *fanh, *hanh > fōh, hōh, 直説法単数 2, 3 人称 POE *fōhist, *fōhiþ, *hōhist, *hōhiþ > (i-ウムラウトと中略)fēhst, fēhþ, hēhst, hēhþ に明確に残っている。

縮約動詞 fōn の過去時制、すなわち直説法過去単数の 1, 3 人称 fēng, 2 人称 fēnge, 複数 fēngon, 仮定法過去の単数 fēnge, 複数 fēngen, 過去分詞 fangen の語根末子音はヴェルネルの法則を反映するものである。Go fāhan の過去時制については、語根末子音がヴェルネルの法則による有声化を受けていないという点では 1 ~ 6 類の場合とまったく同じである。同じことは OE hōn, Go hāhan についてもそのまま当てはまる。

OE fealdan の語根末子音 d は Gmc þ に由来し(Go faifalþ)、これは語中の Gmc lþ が WGmc ld となるという音過程の結果である。他方、同じ ld でもその過去時制 fēold, fēoldon, fealden における ld は Gmc lþ > WGmc ld に先立って Gmc lþ の þ がヴェルネルの法則による有声化を受けていたことによるものと考えられるのである。すなわちゲルマン祖語の無声摩擦音の反映を語根末子音として有する強変化動詞の現在時制と過去時制の間に本来見られたはずの、ヴェルネルの法則に起因する子音交替が現在時制における上記の Gmc lþ > WGmc ld という音変化により消去されてしまっているのである。

(b)語根構造が Gmc ē プラス障害音のもの : OE lætan 'to let' ~ lēt, leort ~ lēton, leorton ~ læten(OS lātan ~ lēt, liet ~ lētun, lietun ~ -lātan, OHG lāzan ~ liaz ~ liazun ~ gilāzan, ModHG lassen ~ ließ ~ ließen ~ gelassen, Go lētan ~ lailōt ~ lailōtun ~ lētans) ; OE drædan 'to dread' ~ drēd, dreord ~ drēdon, dreordon(OS -drādan ~ -drēd, -dried ~ -drēdun, OHG -trātan ~ -triat ~ -triatun) ; OE rædan 'to advise' ~ rēd, reord ~ rēdon, reordon ~ ræden(OS rādan ~ rēd ~ rēdun, riedun ~ rādan, OHG rātan ~ riat ~ riatun ~ girātan, ModHG raten ~ riet ~ rieten ~ geraten, Go -rēdan ~ -rairōd ~ -rēdans) ; OE slæpan 'to sleep' ~ slēp ~ slēpon ~ slæpen(OHG slāfan ~ sliaf ~ sliafun ~ -slāfan, ModHG schlafen ~ schlief ~ schliefen ~ geschlafen, Go slēpan ~ saislēp, saizlēp ~

saislēpun、saizlēpun)。

ゴート語の過去形のうち、saizlēp、saizlēpunに見られる語根初頭 z は s がヴェルネルの法則による有声化を受けた結果であり、これはアクセントが元来は重複音節にはなかったことを裏付けるものである。そして後にゴート語の過去形が語根初頭の子音のヴェルネルの法則による有声化を継承する有声化規則を放棄した結果が saislēp、saislēpun である。同様のことは前記の haitan、fāhan、hāhan についても言えるであろう。すなわちこれらは saizlēp と同様ヴェルネルの法則により語根初頭の子音が有声化された結果、各々 haihait、faifāh、haihāh ではなく *haigait、*faibāh、*haigāh となるのが本来の発達であると考えられるが、ゴート語はヴェルネルの法則による有声化を継承する有声化規則を放棄することにより、時制の変化においてそれまで起こっていた語根初頭の子音交替に伴う語形変化の複雑さを解消した結果、実際の haihait、faifāh、haihāh という形となったと考えられるのである。同様のことはさらに Go *falþan ~ (*fabalþ に代わり)faifalþ、下記の Go saian ‘to sow’ ~ (*saizō (= ON sera) に代わり) saisō、Go *flōkan ‘to bewail’ ~ (*faiblōkun に代わり)faiflōkun、Go hvōpan ‘to boast’ ~ (*hvaigwōp に代わり)hvaihōp についても言えるであろう。

(c)語根が語根母音 Gmc ē¹ で終わっていたもの : OE cnāwan ‘to know’ ~ cnēow ~ cnēowon ~ cnāwen ; OE blāwan ‘to blow’ ~ blēow、blefla ~ blēowon ~ blāwen ; OE crāwan ‘to crow’ ~ crēow ; OE māwan ‘to mow’ ~ mēowon ~ māwen ; OE sāwan ‘to sow’ ~ sēow ~ sēowon ~ sāwen (OS obarseu (過去形) ‘sāte darüber’、ON sá ~ sera ~ seru ~ sáinn、Go saian ~ saisō ~ saians) ; OE þrāwan ‘to twist’ ~ þrēow ~ þrāwen。

(d)語根構造が Gmc ō プラス阻害音のもの : OE blōtan ‘to sacrifice’ ~ blēot ~ blēoton ; OE flōcan ‘to clap’ (OS flōkan ~ -flōkan、OHG -fluohhan ~ -fluohhan、ModHG fluchen、ON flókinn、Go faiflōkun) ; OE hrōpan ‘to shout’ ~ hrēopon (OS hrōpan ~ hriop ~ hriopun、OHG ruofan ~ rief ~ riefun、ModHG rufen ~ rief ~ riefen ~ gerufen) ; OE hwōpan ‘to threaten’ ~ hwēop ~ hwēopon (Go hvōpan ~ hvaihōp) ; OE hwōsan ‘to cough’ ~ hwēos ; OE wēpan (<*wōpjan) ‘to weep’ ~ wēop ~ wēopon ~ wōpen (OS wōpian ~ wiop ~ wiopun、OHG wuofen、wuofan ~ wiof ~ wiofun)。

(e)語根構造が Gmc ō プラス w のもの : OE flōwan ‘to flow’ ~ flēow ~ flēowon ~ flōwen (Skt plāvayate ‘schwimmen lassen’)。

(f)語根が語根母音 Gmc ō で終わっていたもの : OE blōwan ‘to bloom’ ~ blēow ~ blōwen ; OE grōwan ‘to grow’ ~ grēow ~ grēowon ~ grōwen (ON gróa ~ grera ~ greru ~ gróinn) ; OE rōwan ‘to row’ ~ rēow ~ rēowon ~ rōwen (ON róa ~ rera ~ reru ~ róinn) ; OE spōwan ‘to succeed’ ~ spēow ~ spēowon。

7類として分類される古英語のこれらの動詞群にまず共通しているのは、前述のように、現在と過去分詞の母音、そして過去の単数と複数の母音が同一であるという点である。しかしそれ以上に7類が示すユニークな特徴は過去形の母音であり、1~6類において論じたその大部分が印欧祖語のアブラウトに遡ってとらえやすいパターンとは異なるという点である。すなわち7類における現在形の母音と過去形のそれとの関係は一見アブラウトのように見えて実際はそうではない別のものに起因しているという点はもはや異論のないところである。すなわちゴート語では例えば Lat tangō ‘I touch’ ~ tetigī ‘I touched’、Gk léipō ‘I leave’ ~ léloipa ‘I left’、Skt vartati ‘turns’ ~ vavarta ‘turned’ と同様、過去時制を haihait、staistald、faifāh、saislēp (saizlēp)、hvaihōp のように重複 (reduplication) により形成していたことがはっきりと分かるのに対し、古英語を含む北、西ゲルマン語ではほとんどの場合、重複による2音節形ではない、しかし本来のアブラウトを反映するとも思えない OE hēt、stēold、fēng、slēp、hwēop

のような単音節形となっているのである。またゴート語では重複のみならず、lētan ~ lailōt, rēdan ~ rairōd, saian ~ saisō のように1~6類に見られるような強変化動詞の最大の特徴であるアプラウトも同時に伴うケースもある。

古英語を含む北、西ゲルマン語の場合、Voyles(1980, 1992)、Fulk(1987)、d'Alquen(1997)によると、語根の前に重複接頭辞、すなわち語根初頭の子音または子音群プラス母音 Gmc e (= Go ai) を付加するというゴート語と同じ規則が、現在時制の語根母音の前にかつての重複接頭辞の母音であった e を挿入するという規則に変わったのだという：*haitan > *h-é-ait, *aukan 'to increase'(ON auka ~ iók ~ ióku ~ aukinn, Go aukan ~ aiauk) > *é-auk, *hlaupan > *hl-é-aup, *slēpan > *sl-é-ēp, *blōtan > *bl-é-ōt。この変化に至る細かいプロセスについて意見の相違はあるが、特に Voyles はこの変化が起こった最大の要因について、ゴート語に見られるようなかつての重複形において強勢が語根音節から第1音節である重複接頭辞の母音 e に推移したことにあったとしており、この推移の結果、重複接頭辞が過去を表す標識として一層目立つようになり、さらにそれが語根として解釈されるようになったのだという。そしてもとの語根母音が強勢推移により無強勢となっていたため、ai, ē¹はともに ē に、au, ō はともに ō となり、*h-é-ēt, *é-ōk (> ON iók), *sl-é-ēp, *hl-é-ōp, *bl-é-ōt のようにさらに単純化が進んだ結果、古英語では ēē は Gmc ē²の反映と同一の ē(OE hēt, slēp)に、éō は Gmc eu の反映と同一の ēo(OE hlēop, blēot)となったという。

古英語では語根構造が Gmc al プラス子音であるものにおいては過去母音は例えば fēoll, fēold(Go faifalþ), hēold, stēold(Go staistald)のように、そして語根構造が Gmc an プラス子音であるものにおいても過去母音は spēonn, gēong, bēonn のように語根母音が Gmc au, ō であるものと同じ ēo となっている。Fulk(1987: 173)はこの ēo も同じく *f-é-all > fēoll, *g-é-ang > gēong のように現在時制の語根母音の前に e を挿入するという規則により生じたものであり、この規則によりいったん生じた二重母音の NWGmc *ea がさらに既存の二重母音 OE ēo と融合したとしている。この *ea が一見最も近いと思われる既存の OE ēa ではなく ēo と融合したのは、既存の ēa の第一要素が *ea のそれと同じ[e]ではなく [æ]の長音であったのに対し、ēo の第一要素は *ea のそれと同じ[e]の長音であったからではないだろうか。しかしそれを前提とした場合、奇異なことに、語根構造が同じ Gmc an プラス子音に由来するものであっても縮約動詞 fōn, hōn の過去形は spēonn, gēong, bēonn と同様の本来予想されるであろう ēo を示す *fēong, *hēong ではなく、実際にはなぜか hātan, slæpan のタイプと同じ、あるいはそちらへ移行した結果かもしれない fēng, hēng となっている。

blāwan, cnāwan, sāwan のタイプは語根がもともと語根母音 Gmc ē¹で終わっていたが、古英語では語根母音はその通常の発達である æ ではなく、それが古英語において生じたと思われる後続の w の影響を受けた結果音 ā を示しており、その過去母音もまた blēow, cnēow, sēow のように ēo となっている。d'Alquen(1997: 88)はこの ēo は *bl-e-āw > blēow のように現在時制の語根母音の前に e を挿入するという規則により生じた二重母音に由来するとしている。この規則によりいったんは生じたかもしれない二重母音 *eā に最も近い既存の二重母音は本来 ēa であったはずであると d'Alquen(1997: 88)は考えるが、実際には ēa ではなく ēo との融合という結果となっているのは上記の NWGmc *ea のケースと同じ理由によるものではないだろうか。

他方、d'Alquen の考える *bl-e-āw が blēow となったのではなく、Gmc *blē¹anan の語根母音 ē¹ > WGmc ā > OE æ が後続の w の影響で ā となる以前の、あるいは ē¹が WGmc ā となる以前の、すなわちいずれにせよ ē¹がまだ前母音であった段階での e の挿入による *bl-e-ē(w)が OE *blēw となり、さらにこの ē が w の影響による割れの結果 blēow となった可能性も考えられるのではないだろうか。

また sēow の対応形として Go saisō のようなアプラウトを伴う重複形が見られることから、blēow, cnēow, sēow

のタイプの $\bar{e}o$ の形成過程は e と現在母音 Gmc \bar{e}^1 との縮合ではなく e とゴート語に見られるようなアプラウトによる過去母音 Gmc \bar{o} との縮合、すなわち $*bl-e-\bar{o}(w) > bl\bar{e}ow$ 、 $*kn-e-\bar{o}(w) > cn\bar{e}ow$ 、 $*s-e-\bar{o}(w) > s\bar{e}ow$ であった可能性も否定できないであろう。現に Voyles(1980: 117-118)はこの両方の可能性を認めている。

しかし古英語ではやはり e プラス現在母音をあくまでも一律に出発点としていたのではないだろうか。すなわち $l\bar{e}tan$ 、 $r\bar{e}dan$ の過去形 $l\bar{e}t$ 、 $r\bar{e}d$ の対応形にも Go $lail\bar{o}t$ 、 $rair\bar{o}d$ という o -階梯のアプラウトを伴う重複形は見られるが、 $l\bar{e}t$ 、 $r\bar{e}d$ はゴート語とは異なり、疑いなくアプラウトを伴わない形を出発点としている。もしアプラウトを伴う形が古英語において出発点として継承されていたのであれば、 $l\bar{e}t$ 、 $r\bar{e}d$ ではなく $(*l\bar{e}l\bar{o}t > *l-e-\bar{o}t > OE *l\bar{e}ot$ 、 $(*rer\bar{o}d > *r-e-\bar{o}d > OE *r\bar{e}od$ となってしまうであろう。従って $bl\bar{a}wan$ 、 $cn\bar{a}wan$ 、 $s\bar{a}wan$ のタイプの過去母音だけが e プラス Gmc \bar{e}^2 の反映ではなく e プラス Gmc \bar{o} により形成されていたとは考えにくい。

また古英語のアングリヤ方言と詩のテキストでは、ゴート語に見られるような完全な形ではないが、語根初頭の子音または子音群の重複の痕跡をとどめていると思われる形、例えば $h\bar{a}tan$ では $h\bar{e}t$ に対する $heht$ (Go $haihait$)、 $l\bar{a}can$ では $l\bar{e}c$ に対する $leolc$ (Go $lailaik$)、 $sp\bar{a}tan$ では $speoft$ ($< *spespait$)、 $b\bar{e}atan$ では $b\bar{e}ot$ に対する $beoftun$ ($< *bebautun$)、 $r\bar{e}dan$ では $r\bar{e}d$ に対する $reord$ (Go $rair\bar{o}d$)、 $bl\bar{a}wan$ では $bl\bar{e}ow$ に対する $blefla$ という例が見られる。

そしてこれらに加え、Campbell(1959: 320)は、 $l\bar{e}tan$ 、 $dr\bar{e}dan$ ではそれぞれ $l\bar{e}t$ に対する $leort$ (Go $lail\bar{o}t$)、 $dr\bar{e}d$ に対する $dreord$ は、古英語の初期の段階での重複形 $*l\bar{e}lt$ 、 $*dr\bar{e}drd$ が近接する同種の子音または子音群の異化(dissimilation)により $*l\bar{e}rt$ 、 $*dr\bar{e}rd$ 、そしてさらに割れにより $leort$ 、 $dreord$ となった結果であるとしている。

$leolc$ の eo についてであるが、 $*lelaik$ が中略により $*lelc$ となり、 e が後続の lc の影響による割れを受けた結果であるとは考えにくい。すなわち e の割れは lh の前では $eolh$ ‘ elk ’、 $seolh$ ‘ $seal$ ’のように規則的であっても、 lc の前で e が割れを受けるのは、 $aseolcan$ ‘ $to become$ ’: $melcan$ ‘ $to milk$ ’という対比から、一見すると e に s が先行する場合のみのようにも思える。Brunner(1965³: 306)は、 $*lelaik$ の ai が中略以前に \bar{a} ($> a, o$)となったために引き起こされた後舌ウムラウトの結果であるとしている。現に Gmc ai は通常の強勢音節以外では例えば $\bar{e}ored$ ‘ $troop$ ’($< eoh$ プラス $*raid$)、 $earfeþ$ ‘ $trouble$ ’(Go $arbaip$)のように \bar{a} 、後に e となったほか $eofot$ 、 $ebhat$ ‘ $crime$ ’($< *eb$ プラス $h\bar{a}t$ 。- hat は $h\bar{a}tan$ と同根)、 $\bar{e}orod$ ‘ $troop$ ’、 $earfoþ$ ‘ $trouble$ ’、 $wulmod$ ‘ $distaff$ ’(OHG $uuolameit$)のように a または o としても現れており、 $eofot$ の eo は明らかに後舌ウムラウトの結果である。しかし $leolc$ の場合、たとえいったん割れや後舌ウムラウトが起こっていたとしても、アングリヤ方言では lc の前では滑化(smoothing)により e に戻るのが本来の発達であると考えられるのである。他方、Campbell(1959: 57, 320)は $leort$ 、 $dreord$ 、 $reord$ への類推によるものと考ええる。

$speoft$ ($< *spespait$)の eo については、かつては存在した第2音節の母音 $ai > a$ または o が中略に先立って第1音節の e の後舌ウムラウトを引き起こした結果である可能性が $leolc$ の場合よりは高いと思われるが、Campbell(1959: 320)はこの場合も $leort$ 、 $dreord$ 、 $reord$ への類推によるものと考ええる。

$sw\bar{a}pan$ ‘ $to sweep$ ’ ($< *swaipan$)の過去形には本来 $(*sw-e-aip > *sw-e-\bar{e}p > *sw\bar{e}p$ という形が予想されるどころであるが、なぜか実際には Gmc au 、 \bar{o} が語根母音であったタイプに移行したかのように $sw\bar{e}op$ となっている。

$b\bar{e}atan$ の過去形で $b\bar{e}ot$ 、 $b\bar{e}oton$ と並ぶ $beoftun$ の前提となる形は重複形 $*bebautun$ であったと考えられるが、 $beoftun$ の eo について Brunner(1965³: 306)は第2音節にあった $au > o$ が後舌ウムラウトを引き起こした結果であるとしている一方、これについても Campbell(1959: 320)は $leort$ 、 $dreord$ 、 $reord$ への類推によるものと考ええる。

$gr\bar{o}wan$ ~ $gr\bar{e}ow$ のようなものとは語根母音が Gmc \bar{o} で終わっていたものの過去母音 $\bar{e}o$ はもちろん、語根構造が Gmc \bar{o} プラス阻害音である $bl\bar{o}tan$ ~ $bl\bar{e}ot$ と同様、かつての重複接頭辞の母音 e と語根母音 \bar{o} の縮合の結果で

あろう。

以上のことから、古英語の7類には重複(reduplication)の痕跡を示すと思われるものが若干数あるほか、そのような痕跡が直接は見えない他の大多数のものにおける語根母音の交替は表面上は1～6類と同様アプラウトに起因するかのように見えるが、歴史的に見るとそれはアプラウトに起因するのではなく、その過去母音の形成はかつての重複接頭辞の母音 e と現在時制の語根母音との縮合に起因するものであり、そこから現在時制とは異なる母音を有するに至ったと考えられるのである。

しかし7類の時制の変化による母音の相違が6類の場合よりもこのように真のアプラウトとはなお一層無関係であるとは言え、むしろ時制の変化を離れると、7類にはアプラウトの関係にある同根語は間違いなく存在したのである。

次に古英語における時制の変化を離れての同根語の実例を主に Seebold(1970)、Holthausen(1974³)、Watkins(1985)に基づいて挙げ、それをもとに7類の個々の動詞の現在時制が本来属していたアプラウトの階梯についても可能な範囲内で考察してみたい。なお、古英語においてアプラウトの関係にある同根語が見当たらない場合、可能であれば他のゲルマン語からの実例で代用した。

Gmc *laik-(OE lācan) : OE lāc ‘Spiel, Geschenk’(Lith láigau, láigyti ‘mutwillig sein, wild herumlaufen’, Skt rejate ‘erschüttert, zittert’)。そして他の語派のゼロ階梯の同根語と思われるものに Gk elelízō ‘erschüttere’がある。さらに Holthausen(1974³: 190)の挙げる OIr lōeg ‘Kalb’が o-階梯の同根語に間違いなければ、Gmc *laik-もこれと同階梯ではないだろうか。

Gmc *skaid-(OE scādan) : OE gescād ‘Unterscheidung’。Gmc *skīp- : OHG skidon ‘scheiden’。OS skēthan、OHG skeidan、ModHG scheiden、同階梯の同根語と考えられる OE scēap(sceæp、scæp) ‘Scheide’ <*skaiþiz、そしてゼロ階梯の同根語である OHG skidōn から判断すると、OE scādan の語根末子音 d は Gmc þ のヴェルネルの法則による有声化の結果であることは明らかであろう。アプラウトの関係にある同根語としてさらに Seebold(1970: 403)は OE scīd ‘Scheit’を挙げており、彼はこれを e-階梯と見なしている。OE scādan が o-階梯 IE *skoit-に由来するのであれば、確かに OE scīd は e-階梯 IE *skeit-の反映と見なすことができるであろう。しかし Connolly(1979: 19)が主張するように、Gmc *skaid-の ai が IE eA₂i(A₂は、Connolly(1979: 5)の定義では、e を a に変え、かつしばしばギリシア語とサンスクリット語において先行の無声閉鎖音 p、t、k を ph、th、kh に気息化する喉音である)に由来するのであれば、OE scīd を e-階梯と見なすことは不可能となるであろう。そこで Connolly は OE scīd の ī を弱階梯 eA₂i と見ている。

Gmc *swaip-(OE swāpan) : OE āswāpe ‘Kehricht’ <*swaipjan。Gmc *swip- : OE swipe ‘Peitsche’、OE swipor ‘leicht, klug’。そして Go midjasweipans ‘Sintflut’ という唯一 e-階梯を思わせる例があることから、*swaip-は o-階梯である可能性は高い。しかし前記 Gmc *skaid-の場合と同様、Gmc ai が o-階梯、Gmc ī が e-階梯であるとは必ずしも断定できない限り、Gmc ai が喉音を伴う e-階梯の eX₂i または eX₃i、Gmc ī(Go ei)がその弱階梯の反映である可能性は常につきまとうであろう。

Gmc *spait-(OE spātan) : OE spætan ‘to spit’ <Gmc *spaitjanan、OE spātl ‘Speichel’。Gmc *spit- : OE spittan ‘to spit’ <Gmc *spitjanan。

Gmc *hlaup-(OE hlēapan) : OE anlīepe ‘einzeln’、OE hlȳp ‘Sprung’、OE hlēapettan ‘aufspringen’。Rix(2001²: 364)は o-階梯の語根 IE *kloub-に由来するとしている。古英語にはアプラウトの関係にある同根語は見られず、ゼ

口階梯の OHG *loffon* ‘hinüberwachsen, überlaufen’ < Gmc **hlup-*が見られるのみである。

Gmc **gang-*(OE *gangan*) : OE *gang* ‘Gang’。アプラウトの関係にある同根語としては、他の語派に e-階梯の Lith *žengti* ‘schreiten’がある。従って Gmc **gang-*は o-階梯であることがわかる。

Gmc **fanh-*(OE *fōn*) : OE *fang* ‘Beute’, OE *fangian* ‘befestigen’。他の語派の同階梯の同根語と思われるものとしては Lat *paciscor*(OLat *pacit*, *pacunt*) ‘schließe einen Vertrag’が、そして古英語でアプラウトの関係にある同根語と思われるものとしては OE *gefēgan* (OS *fōgian*, OHG *fuogen*, ModHG *fügen*) が挙げられる。Seebold (1970: 186)は前者をゼロ階梯 IE **pX₂k-*と見なし、これに鼻音挿入辞が加わったものが IE **pX₂nk-* > Gmc **fanh-* であるとしている。従って後者はその正常階梯 IE **peX₂k-* または **poX₂k-* ということになる。

Gmc **hanh-*(OE *hōn*) : OE *hangian* ‘hangen’。これは同階梯の同根語 Lat *cunctāri* ‘zögern’から見て IE **konk-* に由来すると考えられる。

Gmc **lēt-*(OE *lætan*) : OE *wætergelæte* ‘Wasserleitung’, OE *ællæte* ‘geschiedene Frau’ < IE **leX₁d-* (Gk *lēdein* ‘träge sein’)。Gmc **lōt-* < IE **loX₁d-* : 古英語に実例はなく、過去形 Go *lailōt*, OSwed *lōt* が見られるのみである。Gmc **lat-* : OE *læt* ‘laß, faul’ (OS *lat*, OHG *laz*, ModHG *laß*, Go *lats*)、OE *lettan* ‘hindern, verzögern, bedrücken’ (OS *lettian*, OHG *lezzen*, ModHG *verletzen*, Go *latjan*) < IE **lX₁d-*。これは Lat *lassus* ‘matt, müde’ < IE **lX₁d-to-* と同根、同階梯。

Gmc **slēp-*(OE *slæpan*) : OE *slæp* ‘Schlaf’ (OS *slāp*, OHG *slāf*, ModHG *Schlaf*, Go *slēps*)。Watkins (1985: 61)、Rix (2001²: 565)は IE **sleX₁b-* に由来するとしている。古英語にはアプラウトの関係にある同根語は見られず、ゼロ階梯と思われる OHG *slaff*, ModHG *schlaff* < Gmc **slap-* が見られるのみである。

Gmc **blē-*(OE *blāwan*) : OE *blæd* ‘Wehen, Blasen’, OE *blædre* ‘Blase’。Rix (2001²: 87)は IE **bhleX₁₋* に由来するとしている。古英語にはアプラウトの関係にある同根語は見られず、ゼロ階梯と思われる ON *blaþra* ‘Blase’ が見られるのみである。

Gmc **sē-*(OE *sāwan*) : OE *sæd* ‘seed’ (OS *sād*, OHG *sāt*, ModHG *Saat*, Go *-sēps*) < IE **seX₁₋* (Lat *sēmen* ‘seed’, Lith *sėjū*, *sėti* ‘säen’)。Gmc **sō-* < IE **soX₁₋* がはっきりと確認できるのは過去形 Go *saisō* のみである。そしてゲルマン語派では見当たらないゼロ階梯 IE **sX₁₋* は Lat *serere* ‘to sow’ < IE **si-sX₁₋* とその動詞的形容詞 *satus* に見られる。

Gmc **blōt-*(OE *blōtan*) : OE *blōt*, ON *blót* ‘Opfer’。他の語派の同根語と思われるものとしては Lat *flāmen* ‘Priester’ < **bhlād-men* があるのみである。

Gmc **flōk-*(OE *flōcan*) : 古英語に同根語なし。他の語派の同根語に Lat *plangō* ‘schlagen’があり、Seebold (1970: 206)は Gmc **flōk-*は IE **pleX₂g-*に、Lat *plangō* は IE **plX_{2-n-g-}*に由来するとしている。

Gmc **flōw-*(OE *flōwan*) : 強変化動詞外の同根語で同じく語根母音に *ō* を有するものには、*w* の後続しない OE *flōd* ‘flood’ (OS *flōd*, OHG *fluot*, ModHG *Flut*, Go *flōdus*)がある。

Voyles (1992: 72)の主張するように、OE *flōd* の語根母音 *ō* は二重母音 IE *ōu* に由来し、しかもこの *ōu* は延長階梯であると考えられる。その根拠は o-階梯と思われる Gmc **flau-* の存在である。あいにく古英語にはこの **flau-* の実例は見当たらないが、他のゲルマン語には OHG *flewen* ‘auswaschen, spülen’ < **flaujanan*, OHG *woroltfloum* ‘Vergänglichkeit der Welt’, OHG *flöder* ‘Wasserguß, Regen’ < **flaupran*, ON *fley* ‘Schiff’ < **flaujan*, ON *flaumr* ‘Strömung’, ON *flaust* ‘Schiff’がある。他の語派の同根語としては、延長階梯の Gk *plō(w)ō* ‘schwimme’, Skt *plāvayati* ‘läßt schwimmen’があり、Sihler (1995: 174)は明らかに e-階梯である Gk *plé(w)ō* ‘float’を同根語として

挙げている。従って Rix(2001²: 485)が OE *flōwan* に対し挙げている IE **pleX₃*-は受け入れ難いと言えるであろう。

そしてゲルマン語派における *ōu* > *ō* という変化を裏付けられる他の実例として、Voyles(1992: 72)は互いにアプラウトの関係にあると考えられる ON *gómr* ‘gum’ < IE **ghōum*-、OHG *gaum* ‘gum’ < IE **ghoum*-、OHG *giumo* ‘throat’ < IE **gheum*-を挙げている。従って、これまで挙げてきた古英語の7類で *āw*、*ōw* を有するものうち、*w* が二次的に生じたものではなく印欧祖語における長二重母音の第2要素 *u* に由来するものは *flōwan* のみであると思われるのである。

Gmc **blō*-(OE *blōwan*) : OE *blōstma* ‘Blume, Blüte’(Lat *flōs* ‘flower’)。Watkins(1985: 7)は**bhloX₁*-に、Rix(2001²: 88)は IE **bhleX₃*-に由来するとしている。いずれにせよ、アプラウトの関係にある同根語としては、ゼロ階梯と思われる OE *blæd* ‘Blatt’(OS *blad*、OHG *blat*、ModHG *Blatt*)がある。

Gmc **grō*-(OE *grōwan*) : OE *grēne* ‘green’(OS *grōni*、OHG *gruoni*、ModHG *grün*) < IE **ghroX₁*-。Gmc **gra*- : OE *græs* ‘grass’(OS、OHG *gras*、ModHG *Gras*、ON、Go *gras*) < IE **ghrX₁*-。

Gmc **rō*-(OE *rōwan*) : OE *rōper* ‘rudder, oar’(OHG *ruoder*、ModHG *Ruder*) < IE **X₁roX₁*-。他の語派には e-階梯の同根語と思われるものに Lat *rēmūs* ‘oar’、Gk *triērēs* ‘trireme’ < IE **X₁reX₁*-、ゼロ階梯の同根語と思われるものに Gk *erētēs* ‘oarsman’ < IE **X₁rX₁*-または**X₁erX₁*-、Skt *aritar-* ‘oarsman’ < IE **X₁erX₁*-がある。

Gmc **spō*-(OE *spōwan*) : OE *spēd* ‘success’(OS *spōd*、OHG *spuot*) < Gmc **spōdiz* < IE **spoX₁*-。他の語派には e-階梯の同根語と思われるものに Lat *spēs* ‘hope’、Lith *spėju*、*spėti* ‘Zeit haben, schnell genug sein’ < IE **speX₁*-がある。

古英語における7類の強変化動詞外の同根語には本来のアプラウトに起因するものこそあれ、1～6類とは異なり、過去母音の反映に等しい母音(OE *ē*、*ēo*)が強変化動詞外の同根語の形成に用いられているケースがまったく見られないという点に注目すべきではないだろうか。4～6類の強変化動詞外の同根語の形成においてさえ、真のアプラウトに起因するものかどうか疑わしい強変化動詞上の Gmc *ē* > OE *æ* (4類と5類)の、そしてやはり多くの場合その真偽が疑わしい強変化動詞上の Gmc *ō* > OE *ō* (6類)の反映に等しいものが普通に現れるのとは対照的である。従って7類の過去母音がアプラウトを反映するものではなく、それはゲルマン祖語よりもはるかに後期のせいぜい北・西ゲルマン語の初期の段階での現象に起因しているに過ぎず、さらにそこへ古英語の音変化の特徴が付加されていったということに疑問の余地のないこともまたこれで改めて確認できたのではないだろうか。すなわち強変化動詞の語根母音の交替が印欧祖語のアプラウトの象徴のようにされていることがしばしばあるが、4～6類については要注意の部分もあり、7類については明らかにそれは完全に的外れであると言えるであろう。

参 考 文 献

- Brunner, K. 1965³. *Altenglische Grammtik*. Tübingen: Niemeyer.
 Campbell, A. 1959. *Old English grammar*. Oxford: Oxford University Press.
 Connolly, L. A. 1979. “*ē* and the laryngeal theory.” *PBB* 101, 1-29.
 d’Alquen, R. 1997. “Non-reduplication in Northwest Germanic: the problem that will not go away.” *NOWELE* 31/32, 69-91.

- Fulk, R. D. 1987. "Reduplicating verbs and their development in Northwest Germanic." *PBB* 109, 159-178.
- Holthausen, F. 1974³. *Altenglisches etymologisches Wörterbuch*. Heidelberg: Winter.
- 森 基雄. 2000. 「古英語強変化動詞 (I)」 『奈良産業大学紀要』第16集、129-37.
- 森 基雄. 2001. 「古英語強変化動詞 (II)」 『奈良産業大学紀要』第17集、123-32.
- 森 基雄. 2004. 「古英語強変化動詞 (III)」 『奈良産業大学紀要』第20集、61-68.
- 森 基雄. 2007. 「古英語強変化動詞 (IV)」 『奈良産業大学紀要』第23集、59-68.
- Rix, H. 2001². *Lexikon der indogermanischen Verben*. Wiesbaden: Reichert.
- Seebold, E. 1970. *Vergleichendes und etymologisches Wörterbuch der germanischen starken Verben*. The Hague: Mouton.
- Sihler, A. L. 1995. *New comparative grammar of Greek and Latin*. New York-Oxford: Oxford University Press.
- Voyles, J. B. 1980. "Reduplicating verbs in North-West Germanic." *Lingua* 52, 89-123.
- Voyles, J. B. 1992. *Early Germanic grammar: pre-, proto-, and post-Germanic languages*. San Diego, etc.: Academic Press.
- Watkins, C. 1985. *The American heritage dictionary of Indo-European roots*. Boston: Houghton Mifflin.
- Wright, J. & E. M. Wright. 1925³. *Old English grammar*. Oxford: Oxford University Press.